

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2025. 10. 11

文責／JUN

お待たせしました

ひぐちさんとの共著、間もなく刊行！

8月5日、6日に開催した「第26回授業づくり・学校づくりセミナー」において予告させていただいた、ひぐちけえこさんと私との共著『詩とアートが“ほんとうのたべもの”になるとき～読むことと描くことをつなぐ～』（世織書房）が、かなりの手を加えて、ようやく【10月末】発刊の運びとなりました。セミナーで予約していただいた方々には長らくお待たせしました。間もなくお送りさせていただきます。書店からもご購入いただけるので、予約されていない方もどうぞお買い求めください。

* * *

この本は、昨年の6月、ひぐちさんと私がコラボして、埼玉県の小学校で行った実践をもとに編んだものです。私が詩の授業をし、その子どもたちを対象にひぐちさんがアートレッスンをした、その授業とレッスンの模様を、子どもが事後に書いた文章を引用しながら詳述しました。その上で、子どもたちの様子を撮影した宮島衣瑛さん（広島大学特命助教）、実施校の小野加津美校長先生にも加わっていただいた4人によるディスカッションを収録しています。表紙カバーはもちろん、本書のあちらこちらの挿絵はすべてひぐちさんの手によるもの、その絵をご覧いただくだけでも心洗われます。

予約していただいた皆さんは、私たちがどういう授業とレッスンをしたのか、そのことに関心を寄せていただいていると思います。もちろん手に取っていただければ、そのご要望にお応えできるのですが、私としては、それだけではなく、それらの実践が私たちに何をもたらしたのかを語り合ったディスカッションに注目していただきたいと思っています。

そこで、私とひぐちさんが語ったもののうちの一つずつを、発刊に先がけて読んでもらおうと思います。この二つの語りが、どのようなディスカッションのやりとりの中で生まれたのか、この二つのことからどんな論議に発展しているか、本を手にとって読んでいただければうれしく思います。

1 「学びの作法」が生み出す学びの世界

【石井】昔から使われている言葉で「学習規律」というのがあるんです。頻繁に今でも多くの学校で多くの先生が使っているんですけど、僕は、その言葉があまり好きではないんですよ。「規律」という言葉は、漢字から考えると、「規則」の「規」と「法律」の「律」ですよ。本当の「規律」の意味は、それは社会における生活基準で、それを自分自身の意思で自らを律するという意味だと思うのですが、学校教育の中で使われてきた「学習規律」は、「こうしなさい」と教師が定めたものだと思うんです。

先ほど、「子どもたちが主役だった」と言っていただきましたが、それは、詩の読みにもアートの表現にも正解などないんだということが一貫して流れていたということから生まれていると思うんですね。それは「規律」に従うこととは真逆のことです。

そこで、「学びの作法」とは何なのかということですが、「作法」というのは例えば、茶道とか書道などで使われているものだと思うんですけど、それは、そのときにその営みをよりよく形作するために必要な行い方ですよね。一方、「礼儀作法」という言葉もありますから、それは対人関係における行い方ということですよ。だから、学びの場合も、教室において何人もの仲間とともに学び合い、その学びをよりよく成就するために、必要で大切な行い方、それが「学びの作法」という意味だと、僕は考えています。

「学び」とは、今、言ったように、規則でこうしなければいけないと教師から与えられた、つまり教師の枠の中で整然と行う、そういうことではない、ぼくは強くそう思います。本当の「学び」は、一人ひとりの自由さの中で生まれるものなんだと……。でも自由とは言っても身勝手にやりたいようにしていいということではなく、仲間と一緒に学び合うんですから、それには、みんなで一緒に学ぶにはこうしたほうがいいということが必ずあります。そういうものを子どもたちとともに私たちの「学びの作法」にしていく、そういうものだと思うんですね。

どうして、私が、詩とアートの授業&レッスンについてのディスカッションにおいて「学びの作法」について語っているのか、それは、ここでは触れませんが、詩を読み、描く子どもたちを目にした私たちがこういうことを話題にしたことに注目していただきたいです。

「みんなで一緒に学ぶにはこうしたほうがよいということ」を「学びの作法」として子どもたちとともに位置づける、私は授業実践者であったころ、それを以下のように行っていました。

今から 40 年も前のことなので、その頃は、まだ「協同的学び」という言い方がされているわけではなく、もちろん学校全体で学び合う授業づくりをしていたわけでもありませんでした。そういう学校で新しい学級をスタートさせた 4 月の学級開き、子どもたちは、すべて前向きにした席について、新しく担任になった私を待っていました。ずっと以前から、机をコの字に並べて「学び合う」授業をしてきた私にとって、この机の並べ方はよいとは言えませんでした。けれども、私は、すぐにそれを変えようとはせず、そのままの状態での授業を始めたのでした。

私は、机が前向きでも、教師主導の「一問一答式」にならないようにしていきました。つまり、私の問いを受けた子どもたちがかわり合って気づき深めていく、そういう学びになるよう心掛けたのです。それは、グループ学びのときだけでなく、「みんな学び」のときでもそうなるようにしました。

そのうち、前の席の何人かの子どもが、後ろの席の子どもが発言するとき、発言する子どもの方を体をねじって聴くようになりました。私は、その子どもの聴き方を褒めました。すると、ほとんどの子どもが同じように後ろを向いて聴くようになってきたのです。一方、前の席の子どもが発言する時ですが、そのほとんどが前にいる私（教師）の方に向かって話す、その様子はいつまでたっても変わりませんでした。けれども、私は、この状態をあえてそのままにしたのでした。

それは、学級の状況によって、4 月下旬であったり 5 月になってからであったりしたのですが、机の並びは前向きのままではあったけれど、友だちの考えを聴こう、聴かなければという意識が芽生え

始めたと感じた頃、私は、次のように子どもたちに持ちかけました。

「この頃、みんなが、友だちの考えを聴いて、聴くだけでなく、そこから自分の考えを深めてそれを話してくれるようになったね。それ、すごくいい！ とってもいい学び方だ。……でも、みんなの様子を見ていて、ちょっとみんなに訊いて見たくなかったことがあるんだ。それは、聴くために体をねじって後ろを向いたり、前の席の人が話すとき、なんだか後ろのみんなに伝えたような感じがしているんだけど、前を向いて、僕の方を向いて話してるんだよね。それって、聴きに良かったり、話しにくかったりしない？ この状態、みんなは、どう感じてたの？」

そうしたら、子どもたちは、次々と口を開き出しました。「後ろを見るのはまあいいけど、前の席のとき話しにくい」「そうそう、前の席の子が言っていることって、前向いて話しているから、時々聞こえないときがある」などと。

それを受けて、私は、子どもたちに相談するように尋ねたのです、「なんとかしたいね。どんなふうにしようか？」と。こうして、互いに向き合う机の並び方である「コの字型」を導入することになったのでした。

机をコの字型にするだけのことで、なぜ、このように回りくどいことをしたのか、それは、「聴き合う学び」にとって、この並べ方が必須のものであり、それだからこそ、子どもたちにその意味が伝わり、それが自覚されるようにしなければと思ったからです。それには、まず、「学び合う」授業の味わいを生み出さなければなりません。その感覚なしで「コの字」にしても、そうすることの良さが実感できないと思ったからです。

ただし、コの字型に机を並べることが学びのための「作法」というわけではありません。それは、机の並べ方という一つの形態だからです。けれど、コの字型を導入するまでの期間で、実は、とても重要な「学びの作法」を子どもたちは身につけているのです。どのように聴くか、聴き合うかということに関心を抱くようになったからです。そして、そうした経験から、仲間の考えがどのようなものであっても尊重して受けとめるという「協同的学び」の精神のようなものを感じ取っていったのです。

私は、今回の本のディスカッションで、「学びの作法」について述べる際、「自由さ」ということを述べ、その「自由さ」は「仲間と学び合う」思いに裏打ちされたものでなければならないと述べています。自分はどうか考えるのか、どう描くのか、それを見つけるには、私たちの思考や感覚が、自在に働くようになっていなければなりません。けれど、それは一人ひとりが勝手気ままに考えているということではだめなのです。教室には何人もの子どもがいます。ということは、そこでいくつもの考えが生まれるということになります。その子どもたちが生み出したものが突き合わされ響き合うようになったら、その教室で生まれる学びは魅力あふれるものになります。ひぐちさんはこの本で、アートにおける「響感性」ということを話されているのですが、人と人とが響き合う状態でこそ豊かなものが生まれるということだと思うのです。「学びの作法」はそれを実現するものでありたいのです。

私は、「学びの作法」をこのように考えています。それは、教師が指導しやすくするためのものであってはなりません。子どもが、学び、学び合うために必須のものでなければならないのです。

2 技術と経験の絶対量

何かを行うには「技術」や「知識」が必要になります。学校は、その「技術」や「知識」を身につ

ける場であると言えます。しかし、それらが、教師から一方的に教えられるものになったとき、その「技術」や「知識」は、生きて働くものにならない可能性があります。

今回の本のディスカッションにおいて、そのことが話題になりました。そのとき、ひぐちさんからとても重要なことが語られたのです。そのことを、前後の脈絡はとれないのですが、それは本を読んでいたかとして、該当部分だけ抜き出しそこで私が何に気づいたのかを述べてみようと思います。

【ひぐち】そうですね。子どもたちには、できるだけいろんな試し方をしてほしいんです。筆を紙に押し付けて描いてみたり、筆を振ってスパッタリングしたりしてる子など、いろんな子がいたでしょう？ 自分なりにいろんな試し方をしてみて初めて、素材や道具を自分のものにできると思っていて。もし「絵の具っていうのはこんなふうにちゃんと付けて、こうやって綺麗に塗るんですよ」だけだと、いつまでも人のルールに乗っていて、アートで表現することが自分のものにはならない。絵の具にまみれて自分でいろんなこと試してみたら、意外と面白い表現が生まれるんだって子ども自身が思えて初めて、絵の具と仲良くなれる。好きになれる。道具や素材を自分のものにする時間って、意外と図工の授業で与えられてないのね。「まみれる」とか「試す」を通じて夢中になってやり込むところが、一生を支えていくと思っていて。それって自分なりの学び方を「創ってる」というか……。アートってやっぱり素材だから、そこを保障したいっていう気持ちはすごくある。

ニューヨークにいた時に、音楽家カップルのベビーシッターをしたの。その方たちはオーケストラに所属しながら、留学生も含めていろんな学生さんの指導をしてる人たちだったの。「日本から来た学生はどうか」って聴いたときに「日本から留学してきてる子たちはすごく技術はある。でも、聴いてる音楽の絶対量が足りない」って。で、やっぱり最後に演奏家として立っていくときに、その聴いてきた絶対量が演奏を支えていく、って言うんだ。例えばバッハのバイオリン・ソナタを弾く時に、たくさんの演奏聴いてれば、自分がボンヤリとイメージしているものを掴むヒントを見つけられる。いろんなバリエーションを聴いていけば「こうでなければならない」ではなく、「こういうのもある、こんなふうなものもある。じゃあ自分はどいうなの？」って考えられる。自分に与えられたイメージを掴む力、またはっきりとしたかたちになってないけれど、こういうふうにやってみたいっていう想いを掴む力、イメージする力だけでなく、そういうイメージを掴む力をも、アートで育みたいなっていう思いは、割とはっきりありますね。

だから、ちゃんとできるようになりなさいの前に、やってみたいこと試してごらん、っていうことが大切。急に「やりたいことやってごらん」って言われても戸惑うから、むしろその手前で、自分のやりたいことを、自分なりに掴めるように励ますことが大切なんだと思ってる。失敗しても大丈夫だから試せるっていう機会をできるだけ与える、っていうことかなあ。寄り添いながら。

たくさんの子どもたちと関わる中で私が学んだのは、最初の一步を踏み出すことが、一番ハードルが高くて大変だということ。一度でも経験をしていけば、次は、あ、なんか知っているな、で大丈夫。自分から、行ける。でも一步を踏み出してなければ、知らないから怖くて、なかなか足を踏み出せない。だから最初の一步の機会をいっぱい渡したいの。なんか、やってみようよーって。

ひぐちさんが「やっぱり最後に演奏家として立っていくときに、その聴いてきた絶対量が演奏を支えていく」と話しておられるのは、音楽の演奏家のことです。でも、そのことは、私たち教師も同じなのではないでしょうか。

私が文学の授業づくりに取り組むようになったのは、教師になって2年目の頃でした。私の勤める学校の先輩教師であるS先生の影響を受けたからです。私は、憧れのまま、次から次へと文学の授業実践に取り組みました。

それから3年後、転勤した学校で私は4年生を担当しました。その学級で2つの鮮烈な経験をしたのです。その一つは、神戸市立御影小学校元校長の氷上正先生に厳しいコメントをいただいたことです。そしてもう一つ、それこそがひぐちさんの話とつながることです。

私のクラスにN・Hくんという子どもがいました。その子どもの保護者(母親)が私のクラスのPTAの学級委員でした。そういうこともあり、その保護者・Nさんと絶えず連絡をとっていました。そのうち、お母さんだけの懇談会を開きたいという申し入れをNさんから受け、子育てについてざくばらんに話し合う会が開かれるようになりました。私は、その学級を卒業するまでの3年間受け持ち(4年生から5年生になる際に一度編成替えがあったが)、Nさんとのかかわりは3年間続いていきました。

Nさんは、市立図書館で開かれている読書会の常連でした。つまり、文学の素養にあふれた人だったのです。学校には授業参観があります。だから、当然、Nさんが私の文学の授業を見ることになります。ある日の授業参観の後、Nさんが私に次のように言ったのです。「石井先生、うちのH(Nさんの子どものこと)が先生の授業が楽しいと言っています。親としてうれしい、喜んですます！でも、これから先の先生の授業は、先生がどれだけ文学を読んでいるかという量で決まるんじゃないかな。だから、読んでいるのが授業をする教材の物語だけではだめ！もっとたくさん、文学を読んで！」

私が多くの小説を読むようになったのは、それからでした。それは、当然、授業づくりのためではありませんでした。だから、何冊も読むうち、純粋に文学を読む愉しみのようなものを感じるようになり、名作といわれているものはもちろん、現代作家の新作も、新聞の読書欄や広告欄を見て購入するようになったのでした。私は悔やみました。もっと早くからこうしていればよかったと。それは、純粋な気持ちで読むことで、文学の味わいのようなものを感じるようになったからでした。私は、授業をするためという枠の中にいる限りこの感覚は生まれなかったらうと思いました。

というわけで、私の文学とのかかわりは遅咲きでした。でも、遅くなったけれど、読書を楽しめるようになったことは、私の人生に潤いを与え、人としての幅のようなものも多少は生みだしてくれたように思うのです。そして、そういう感覚が、いつの間にか、文学の授業における変化につながりました。何よりも、子どもから生まれ出る自分にはない読みに心打たれるようになったのです。その時私は、「今、自分は、子どもとともに文学の世界を味わっている」、そう感じました。

この私の体験は、ひぐちさんの話されたこととつながっているのです。私の文学の授業は、読む絶対量が増えることによって変化したからです。優れた授業技術が身についたということではありません。子どもとともに、物語の世界で生きられるようになったのです。もちろんひぐちさんが話された演奏家とは比べものにならないささやかな体験です。けれど、絶対量が大きくものを言うということは本当のことだと今なら断言できます。絶対量がなければ、音楽でも、ものづくりでも、私たちの授業でも、「深み」や「渋み」や「味わい」は出てこないのです。

しかしここではっきり思うのは、絶対量に向かう歩みは終わりのない旅だということです。絶対量

はどれだけの量かなんて言えるわけではありません。だから、目の前の子どもは1年1年変わるじゃない。そんな遠回りで悠長なことはしてられない。そう言う人もいるでしょう。

けれど、急がずゆっくり「ある一つのこと」を持続させていけば、どれだけかの『時間』がたったとき、ふと、自分のなかの何かが「いい感じになっている」と気づけるのではないのでしょうか。そういうときがきつとくるのだと思うのです。

自分の中の絶対量が少しずつ豊かになる、それは楽しみなことです。そして、それが授業なら、そのことによって子どもたちの学びをよりよいものにできます。「持続し、蓄積する」、そのことによって自分の中に「絶対量」が増えていく、人生において忘れないでいたいことです。

もう一つ、ひぐちさんの言葉で、「学び」でもそうだと感じたことがあります。それは、「いろんなバリエーションを聴いていれば『こうでなければならない』ではなく、『こういうのもある、こんなふうなのもある。じゃあ自分はどうなの？』って考えられる。」という言葉です。

「学び」に取り組む私たちは、学びは聴くことで生まれ深くなると考えています。自分の考えだけに閉じ籠って他者の考えに耳を傾けない状態に陥った子どもは、自分の考えを絶対視して、そこから一歩も出ようとしません。私たちの考えは、異なるものと出会うことにより、考え直したり、融合したり、それを機会に別角度から考えたりして、確かになったり深くなったり新しくなったりします。他者の考えを聴かないということは、それができるチャンスを自ら消し去っていることになるのです。

ひぐちさんの『『こうでなければならない』ではなく、『こういうのもある、こんなふうなのもある。じゃあ自分はどうなの？』って考えられる。』ということは、まさに、「聴くことの重要さ」と「聴くとはどういうふうに心を働かせることなのか」ということを、私たちに教えてくれています。「聴く」とは、自分に都合のよいものを探すことではないのです。むしろ、『『こういうのもある、こんなふうなのもある』と、自分の考えとは違うものと出会う、それが大切なのです。そのことによって、思い込んでいた自分の考えにゆさぶりがかり、そのとき人の考えは進展するからです。

そういえば、私は、このごろ、「3つの『い』が学びを深める」と言うようになりました。末尾に「い」がつく「分からない」「間違い」「考えの違い」の3つです。早く解決しようと急がない「柔軟な思考」、「異質なものととの出会いから学ぼうとする思考」、それが「学び」を豊かにするのです。

* * *

と、ここまで述べてきたことは、まもなく発刊される私とひぐちさんとの共著のディスカッションで語られたことに基づいてのものです。

この書は、冒頭で述べたように、私たちが行った詩の読みとアートをつなぐ取り組みに対してのものですから、文学及び美術の実践書だと受け取られて当然です。現に、お読みいただければ、私がどのような詩の授業を行ったか、ひぐちさんがどんなアート・レッスンをされたかを知っていただけます。しかし、このたよりをお読みいただいた皆さんは、ここで私たちが語り合ったことは、アートの世界だけのことでなく、「学び」全般に通じることだと気づいていただけたのではないのでしょうか。

アートの学びは、学びのど真ん中に位置している、私は、今、はっきりそう感じています。そして、デジタル化や効率化に走る現代社会において、アートの学びこそが重大な意味を有している、そう思います。それはどういうことか、私たちの書からその意味を感じていただけたらうれしいです。そして、読んでくださった皆さんとともにその考えを深められたらと思っています。